

親子協業でjump!

～ 山口方式による安全で安心なノリづくりへ向けて ～

藤曲浦漁業協同組合 青壮年部
部長 花 沢 勲

1. 地域の概要

私の住んでいる藤曲浦地区は、工場地帯が広がり、人口が密集する、山口県宇部市の西部にあります。漁協事務所のすぐそばに、全線を電化された宇部線の居能駅があり、歩いて行ける距離にショッピングセンターがあるなど、生活するにはたいへん便利なところですが。しかし反面、港が狭く、空き地がほとんどないなど、漁業には悪い条件も揃っています。

2 漁業の概要

(PI)

藤曲浦地区は、宇部市を縦断して流れる厚東川の河口に開けていることから、ノリ養殖に適しており、県内の他地区にさきがけ、明治時代からノリ養殖が営まれています。昭和40年代まで、県内には有力な産地がなく、ノリ養殖では先頭を走ってきました。しかし、昭和40年代に入って浮き流し方式が開発され、干潟のない地区でもノリ養殖が可能になると、よその地区でも品質のよいノリが効率的に生産されるようになりました。もちろん、私たちの地区でも浮き流し方式を導入し、沖合に出て、効率性を求めました。しかし、淡水の流れ込みがあるため、他の地区よりキメの細かい管理が必要とされる中、ノリの生産がない夏場に、河口の干潟で漁獲していたアサリの水揚げが多かったため、相対的にノリの管理がおろそかになり、ノリの生産技術は下がってしまいました。(PIVの上の図)

3 実践グループの組織と概要

藤曲浦漁協青壮年部は、昭和60年に設立され、約20年にわたり、先進地視察や地区活動を積極的に行ってきました。設立当時の構成は不明ですが、現在は、20代1名、30代1名、40代7名、50代6名の計15名で、漁業生産活動の改善に取り組んでいます。

4 実践活動課題選定の動機

私は、昭和60年にUターンして、すぐノリ養殖に携わりました。従事するうちに、問題意識を持つようになりましたが、意に反して、何の変化も起こせませんでした。それは、漁協の規定により、正組合員になれず、経営に参画できなかったため、発言力がなかったからでした。そうした中、規定が変わり、平成7年に正組合員になれたのに続いて、平成9年には自分の漁場が持てることになりました。ようやく自立できる機会が巡ってきたわけですが、私はそれを変革へ向けての「大きなチャンス」と捉えました。しかし、もう1つ大きなハードルがありました。それは、「乾燥機をどうするか」ということでした。ノリ養殖を経営するには、どうしても乾燥機を確保しなければなりません。しかし、乾燥機自体が1千万円を超す高価なものである上、前述のように、乾燥機を置く土地の確保が極めて難しい状況でした。このように、単独で乾燥機を持つには大きな障害がある中、養殖経営に参画し、発言力を確保するには、新たな乾燥機を持たないで、自分の漁場を持つ方法を考え出し、実践するしかないと思い、協業によりそれを実現しようとしたのです。

5 実践活動状況及び成果

平成7年当時から、青壮年部の役員として、先進地視察などを積極的に行い、情報収集に努め、兵庫県や佐賀県では「5軒での協業化」を視察することができました。乾燥機を5軒で1台に集約すれば、乾燥機の使用効率が理想的となり、大きくコストダウンが図れる、ということでした。こうした先進地の事例を参考に、もう1人の仲間と協業化について検討を重ねました。もう1人というのは、私と同じころUターンし、私と同時に正組合員になり、常に悩みを共有していた、現在山口県漁青連会長の中村さんです。

当然、最初は「5軒での協業化」について検討しました。しかし、5軒用の乾燥機を購入するため、新たに投資しようという人を見つけるのは、至難のワザでしたし、仮に資金が確保できても、大型の乾燥機が置ける用地もないのが現実でした。乾燥機を単独所有する見通しも相変わらず立たない中、苦境を打開する妙案がないものかと、2人で毎日のように知恵を搾りました。その結果、「乾燥機1台を親子の2軒で使用する協業化なら可能だ」との結論になったのです。協業化自体、山口県では初めてのことでしたし、先進地視察でも「2軒での協業化」は聞きませんでしたので、不安で一杯でしたが、結論が出た後は、迷いませんでした。漁協に新規の漁場行使を申し込むとともに、それぞれの父親を説得し、新規着業者とその父親の、2軒による協業化を、2組同時に実行に移したのです。

その概要は次のとおりです。私と中村さんは、それぞれの父親の従事者として、ノリ養殖に携わっていました。沖で摘み取ったノリを、乾燥場に持ち帰り、乾燥、箱詰めまで行ったあと、また沖に戻り、網の張り替え、活性処理等を実施するというサイクルを、毎日、それぞれの父親といっしょに繰り返していたのです。乾燥作業終了後の網作業、摘み取り作業とも4～5時間かかるため、乾燥機を稼働できる時間は、平均5時間程度でした。

陸での乾燥作業は父親にまかせ、私たちが沖の作業に専念すれば、私たちが沖で作業している間も、父親が乾燥機を稼働させるので、乾燥機の稼働時間が延びるというのが協業化の構想でした。ノリの生産量は乾燥機の稼働時間に比例するため、乾燥機の稼働時間が延びれば、2軒分の漁場のノリを1台の乾燥機で加工できる、と考えたのでした。(P II)

試行錯誤を重ね、私達のチャレンジは成功しました。2軒分の漁場で採れたノリを、1台の乾燥機で加工できるようになったのです。製品の枚数で言うと、1日1万2千枚だったものを、協業化により、2万枚まで増やすことができました。厳密には、2軒で2万枚ですので、元から経営者だった父親側からみると、生産量が減ったわけですが、機械の減価償却費ほかを折半したので、経費が大幅に減り、経営的には成功と言えるものでした。

その後、機械を少し大型化し、以前は乾ノリに加工できず、廃棄していた分まで加工できるようになり、現在は、1日で3万枚のノリが生産できる水準になりました。

また、協業化には、1人1人の作業時間が短縮され、余裕が生じるという副産物もありました。そして、できた余裕を活用して、沖でも、乾燥場でも、品質管理の徹底を進めることができました。その結果、ノリの品質が向上し、単価も上がりました。

そうした取り組みに並行して、情報収集も進めました。そうして得た情報を活用し、平成11年には、新しい活性処理方式を導入することができましたし、平成13年には、山口県で最初に「異物除去機」と「異物検出機」を全戸に設置することもできました。

こうしたことが相乗効果を挙げ、藤曲浦のノリ生産は、近年順調に伸びています。1経営体当たりの生産枚数は、私たちが経営を開始して以降、増加し続けていますし、1経営体当たりの生産金額は、平成12年に前年の約2倍を記録して以降、その水準を保っています。

す。(PⅢ) また、以前は県平均を1割以上下回っていた単価も、現在は県平均を上回っています。(PⅣ)

6 波及効果

私たちは、青壮年部の集まりや活動の場を主体に、「2軒での協業」のメリットをPRし続けました。最初、反応は鈍いものでしたが、成果が具体化するにつれ、協業によりノリ養殖経営を開始する青壮年部員が続きました。平成13年に1組、15年に2組の協業が実現し、5組10軒が協業しているというのが現状です。(PⅤ) 10軒のうち7軒が青壮年部員で、お互いに情報提供し、お互いに影響し合い、地区全体で改善を進め、着実に前進しています。

7 今後の課題や計画と問題点

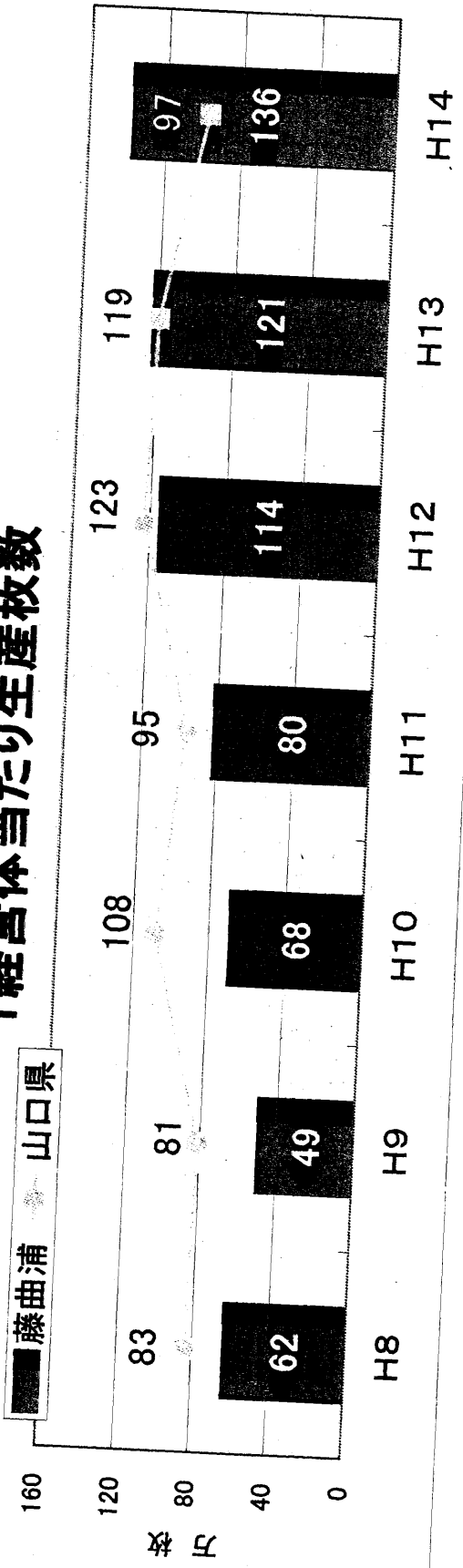
「2軒での協業化」はコスト削減だけを見れば、「5軒での協業化」に及びません。しかし、以前の経営に比べれば、コストを大きく削減できましたし、品質が向上するなどの効果も発生しました。何よりも、2人というのは、意見の違いを調整しやすい、というメリットもあります。そうした点を総合すると、「2軒での協業化」は、藤曲浦という地域性にあった、優れた生産方式であると確信しています。

今後は、青壮年部員相互で、より切磋琢磨し、「2軒での協業化」のメリットをさらに延ばして、消費者が強く求める「安全で安心なノリづくり」を強力に推進するつもりです。そして、私たちがスタートさせた「2軒での協業化」が山口県をリードし、ひいては「山口方式」と呼ばれるようになることを夢見て、さらに精進を続けようと思っています。

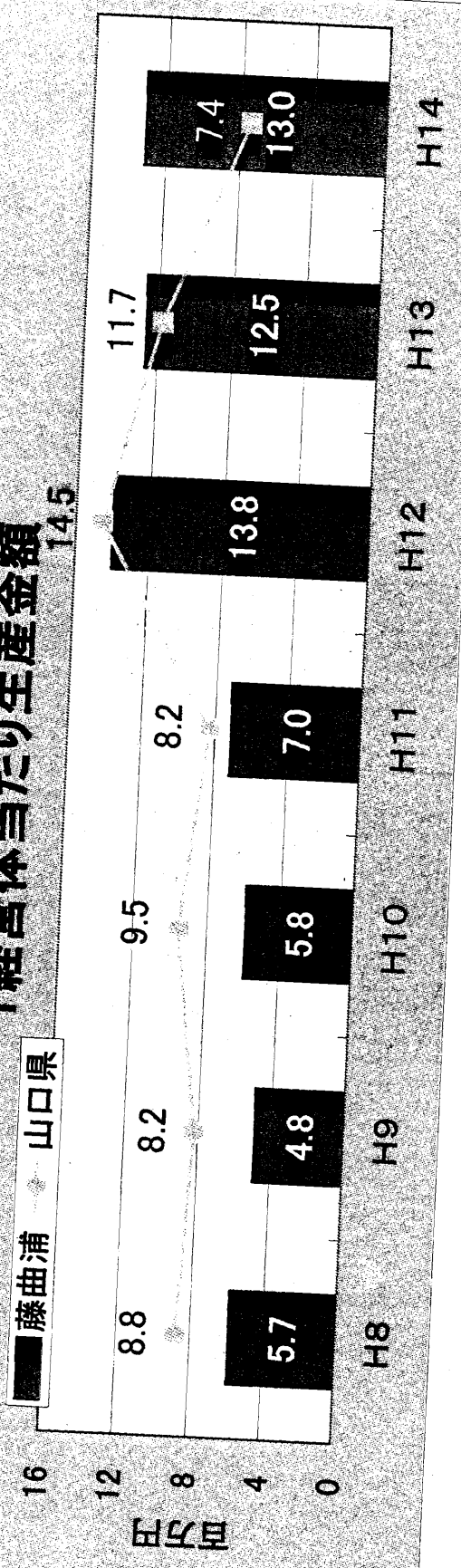
図 表

- | | |
|----------------------|-------------|
| ○ 藤曲浦漁協の水揚げ高(平成14年度) | <u>(PⅠ)</u> |
| ○ 1日の作業工程 | <u>(PⅡ)</u> |
| ○ ノリ単価の比較 | <u>(PⅢ)</u> |
| ○ 1経営体当たり生産枚数 | <u>(PⅣ)</u> |
| ○ 海苔養殖経営体数の推移 | <u>(PⅤ)</u> |

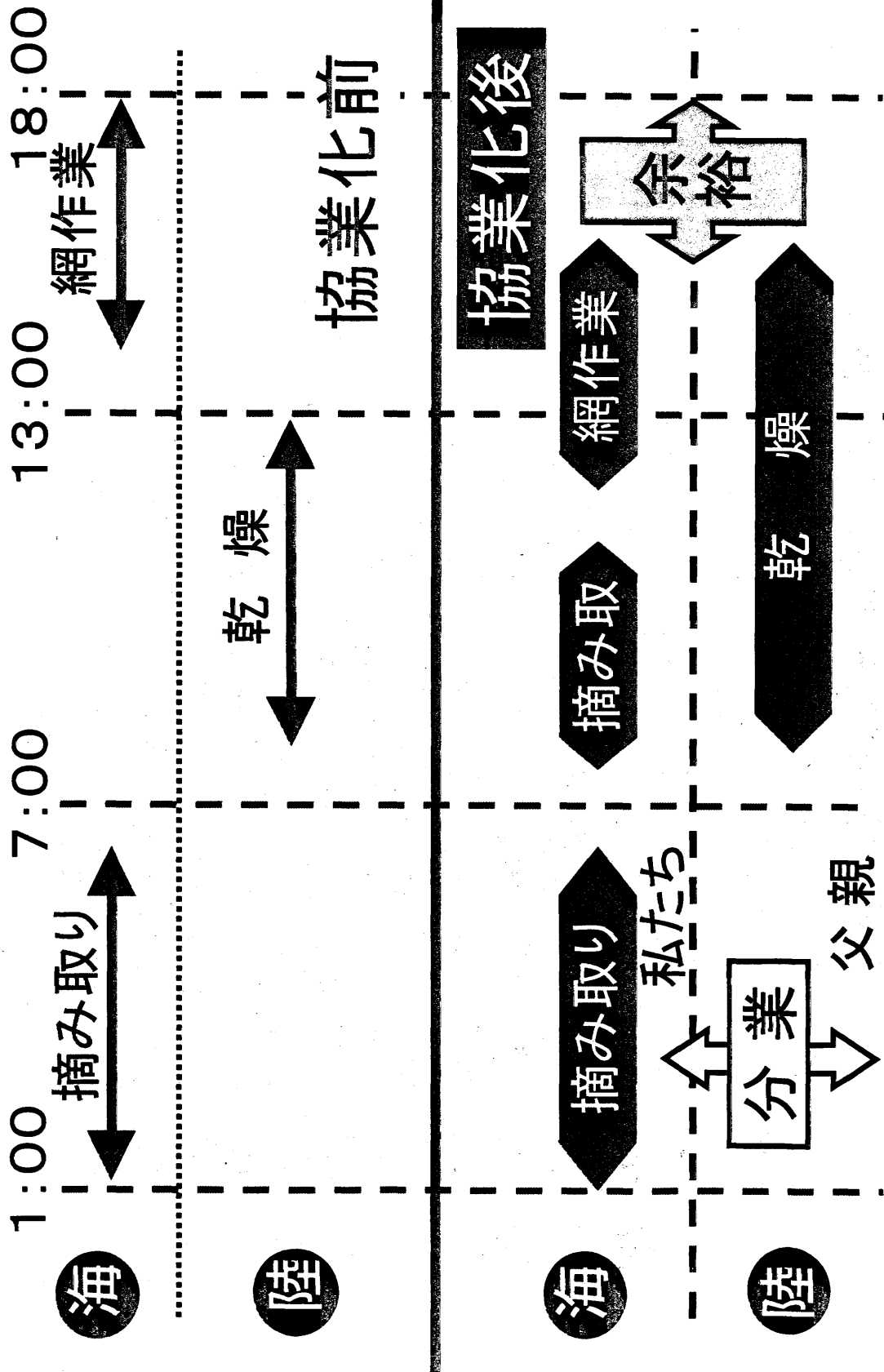
1 経営体当たり生産枚数



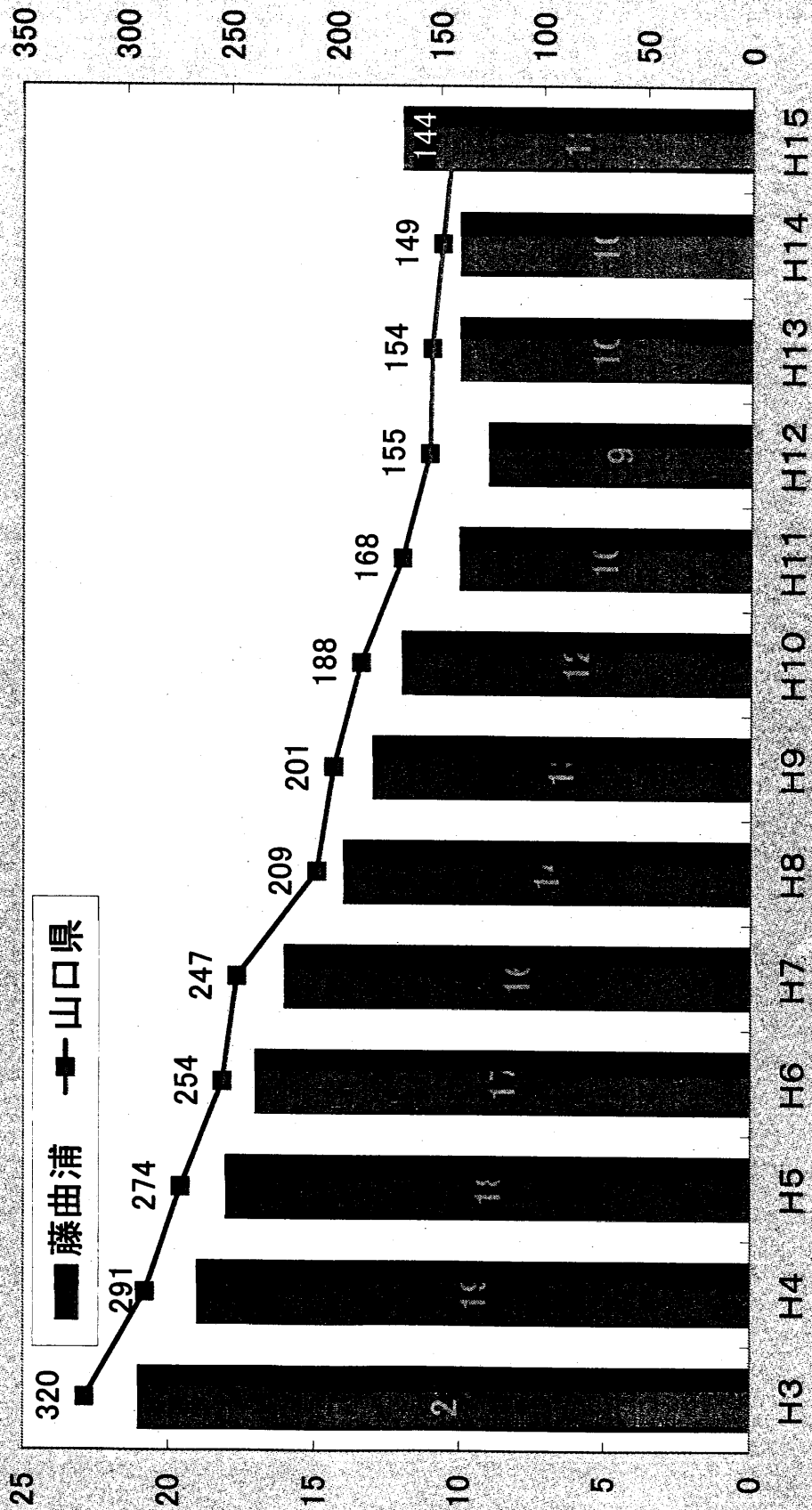
1 経営体当たり生産金額



1日の作業行程



海苔養殖経営体数の推移



1枚当たり平均単価

